

説教 『不信仰に踏み込んで救う方』山本 護牧師
聖書 エレミヤ書 14:7~9/マルコによる福音書 14:53~65

福音書の受難場面は、イエスを真ん中にして二つの立場を語っている。一つはイエスを殺そうとする体制側、もう一つは裏切り逃亡する弟子たちの側。この両方の立場から、いわゆる「罪」が露わにされる。神が「罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断された(マ 8:3)」。人間としては「罪」が処断されないよう抵抗し、殺す側も逃げ出す側も、各々の立場で罪の形を描き出している。ここ数回、裏切るユダ、およびユダを含んだ使徒＝教会、そして教会と相似形の個々人の闇について、福音書に聞いた。そして、どれほど深い闇であっても、そこに御手が差し伸べられている真実を知った。今日はもう一方の、殺す体制側の様相を見てみよう。

イエスを捕らえたのは凶暴な自警団ではない。立法や司法をも統べる信仰権威であった(マルコ 14:55)。逮捕容疑は「この男が、[わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる]と言うのを、わたしたちは聞きました(14:58)」という証言による。用意周到とはいえ夜ふけの闇裁判のこと、「多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていた(14:56)」。また容疑理由のイエスの言質についても「彼らの証言は食い違った(14:59)」。律法は本来、偽証を厳しく斥けるものだが(申命 19:15~19)、大祭司が誘導尋問で引っ掛け(マルコ 14:61~63)、敬虔な言葉で処刑の雰囲気を整えた(14:64)。思想を取り締まった日本の特高もこんな感じだったのだろう。

私事ながら、処分場反対運動で裁判をしていた頃、訴えもし訴えられもして5回敗訴した。訴状に記した不正行為に「確認書問題」があった。山梨県の職員が深夜、籠絡済みの自治会長宅へ行って印鑑を押させ、それをもって「地域同意を得た」として計画を推進した。昼の役所は紳士的でも、夜暗躍する。沖縄ではこうした行政の裏技が常態化している。遠い日の、最高法院の不義だけではない。現代日本は戦争の可能性や格差を拵げ、その暗さの中で、今、イエス・キリストが裁かれている。

裁かれているイエスに目を注ぐと、預言者の言葉が耳に聞こえて来る。「なぜあなたは、とまどい、人を救えない勇士のようになっておられるのか。(エレミヤ 14:9)」。私たちは裁かれているキリストを遠くから見ている。恐れて逃げはしたが、物陰からキリストを裁く闇を窺っている(マルコ 14:66~67)。私たちは裏切ったユダか、逃げ出した弟子たちか。「我々の罪が我々自身を告発しています(エレミヤ 14:7)」。私たちは確かに、弟子の誰かだ。深い人間の闇。こんな私の闇の中へも、キリストは黙々と入って来られる。「主よ、あなたは我々の中におられます(14:9)」。ああ、なんと、かたじけない預言か。

死刑が決議されると(マルコ 14:64)、「ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、[言い当ててみる]と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った(14:65)」。唾を吐かれ、殴られているイエスを今、見ている。私たちは己が罪の自覚によって(エレミヤ 14:7)、私の内におられる痛ましいキリストに気づく(14:9)。世の闇、不信仰の中に踏み込んで人間を救おうとされるキリスト。この「愛」をどう表しえるか。信仰とは罪の自覚、そこに愛が惜しみなく注がれている真実との出会い。



【おまけのひとこと】

受難風景 街は殺意に満ちている ユダは殺意から逃れる方策を考え 物騒な師の歩みを止めようとした 巨大な鉄球は留めえない 罪に曳かれ ゆっくり ゆっくり回転していく 人間の底まで